武蔵野日曜聖書講筵

労働と平安

――テサロニケ後書第3章――

１９９２年12月13日
小池辰雄

戦闘のひと　信実の信愛　働かざる者は食うべからず　愛はアルファにしてオメガ　平安の主
平安がきていれば何かやらざるを得ない

【テサロニケ後3】

1終に言わん、兄弟よ、我らの為に祈れ、主の言の汝らの中における如く、
疾く弘まりて崇められん事と、2われらが無法なる悪人より救われんことを
祈れ。そは人みな信仰あるに非ざればなり。3然れど神は真実なれば、汝ら
を堅うし、汝らを護りて悪しき者より救い給わん。4斯て我らの命ずること
を汝らが今も行い、後もまた行わんことを、主によりて信ずるなり。5願く
は主なんじらの心を、神の愛とキリストの忍耐とに導き給わんことを。
6兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず、我等より
受けし伝に従わずして妄に歩む凡ての兄弟に遠ざかれ。7如何にして我らに
效うべきかは、汝らの自ら知る所なり。我らは汝らの中にありて妄なる事を
せず、8価なしに人のパンを食せず、反って汝等のうち一人をも累わさざら
んために、労と苦難とをもて夜昼はたらけり。9これは権利なき故にあらず、
汝等をして我らに效わしめん為に、自ら模範となりたるなり。10また汝らと
偕に在りしとき、人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。
11聞く所によれば、汝等のうちに妄に歩みて何の業をもなさず、徒事にたず
さわる者ありと。12我ら斯くのごとき人に、静かに業をなして己のパンを食
せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて命じ、かつ勧む。13兄弟よ、
なんじら善を行いて倦むな。
14もし此の書にいえる我らの言に従わぬ者あらば、その人を認めて交るこ
とを為な、彼みずから恥じんためなり。15然れど彼を仇の如くせず、兄弟と
して訓戒せよ。
16願くは平和の主、みずから何時にても凡ての事に平和を汝らに与え給わ
んことを。願くは主なんじら凡ての者と偕に在さん事を。
17我パウロ手づから筆を執りて汝らの安否を問う。これ我がすべての書の

記章（しるし）なり。わが書けるものは斯の如し。18願くは我らの主イエス・キリストの恩恵（めぐみ）なんじらの凡ての者と偕（とも）ならんことを。

●戦闘のひと

今日の、テサロニケ後書第3章は結びのところです。「労働と平安」と題しました。

1終に言わん、兄弟よ、我らの為に祈れ、主の言の汝らの中における如く、疾（と）く弘（ひろ）まりて崇（あが）められん事と、

昔は、特にアンチ・キリストの霊がたくさん迷っていますから、戦いなんです。我々キリスト者は本当の意味で戦士でなければダメです。戦わなければいかん。今はいわゆる迫害はないけれども、このいい加減な、神無き民主主義の日本に於て、はっきりと福音の戦いをしていく。

「信仰しているから、いいや」

なんて、そんなものではない。日本は、神無き民主主義なんてとんでもない。西郷南洲の、

「敬天愛人」

です。敬天がない。敬天がないから、本当の愛人がない。西郷隆盛の「敬天愛人」という言葉は世界的な言葉です。私は名言だと思う。彼はその通り生きた人ですから。

私は中学・高等学校の校長をしていたときにも、西郷さんのこの言葉を教育の大前提にして、

「君たちにとっては、『愛人』とは本当の深い友情をもって交わることだ。人を蹴飛ばして、自分がいい成績をとろうなんて、そんなことではない。互いに助け合っていけ」

と語った。

2われらが無法なる悪人より救われんことを祈れ。そは人みな信仰あるに非ざればなり。

不法なる悪人がいるんだ。書いていることはまことしやかな事を書いている。そうすると、それに引っ掛かってしまう。そういう大インチキがある。私たちは偽りのものに対して戦う。皆さん、我々は、キリストの直弟子の次元――カトリックでもプロテスタントでもない――キリストの直弟子の次元に一緒になって、キリスト直結でいくのがこの召団の信行です。それだけの戦いを我々はしていく。

いいですか。いい加減な気持だったら、しょうがない。はっきりと、そういう戦闘のクリスチャンでいらっしゃってください。イエス・キリストは本当の戦闘のひとだったから。キリスト自身が旧約聖書に対して逆らった。ただ、預言者の宗教だけは、彼は受けとっていった。律法や祭儀の宗教に対しては、キリストは戦った。だから、嫌われたんです。

「我が名のためには凡ての人に憎まれん」

とキリストが言われたのは、そのことなんだ。それくらいの気迫をもっていかなければダメなんだ。

●信実の信愛

[3]然れど神は真実（まこと）なれば、汝らを堅うし、汝らを護りて悪しき者より救い給わん。

この「真実」の「真」の字は――真実でもいいけれども。藤井先生はこういう真実が好きだった。ドイツ語の

「ヴァールハフテッヒカイト」「偽りのないまこと」

ということ――「まこと」というのは、この「真実」ももちろんその中にありますけれども、絶対に人を裏切らないことで、「信実」の「信」です。

「神は信実である」

というのは、神さまの方は私たちを信じてかかってくださる。しかも、神さまはこの信実をもって信愛したもう。信じ愛したもう。だから、信愛に対するに信愛をもって答えるのが信仰ということだ。「信仰」なんて言わなくたっていい。

「信愛」

でいいんだ。「信仰」という字は、みんな仰ぐと書くけれども、仰ぐではいつまでたってもダメだから、

「信交」

信じ交わると書く。キリストの中に入る。ただ祈るのではなくて、祈入する。祈り入る。キリストの中に入らなければ、本当の祈りにはならない。投身の祈りです。

福音の真理の内容については、私は賀川先生に負けませんよ。賀川先生の実存そのものは、私は無条件に敬意を表しますけれども。

[3]然れど神は真実（まこと）なれば、汝らを堅うし、汝らを護りて悪しき者より救い給わん。

「救い給わん」

ではない。

「救い給う」

です。信交の世界は、「…たまわん」なんていう蓋然性（がいぜん）の言葉はダメなんです。必ず救ってくださる。

「そうか、救いたまわんとあるから、救わないこともあるか」

なんて、そうではない。ギリシア語の未来形を日本語で

「…であろう。…たまわん」

とか、そんなテンス（時称）にこだわらない。信交の世界は全部、直説法・現在です。信は

即ち現(うつつ)の世界です。昨日でもなければ、明日でもない。今、現に、直ちに受けとっていく。だから、力がくる。私は話しながら、力がきてしょうがない。あなた方は聞きながら力がきてしょうがない。それが本当の集会なんだ。

「そうですか、それではよく考えてから……」

なんて、何を言っているか。

「考えてから」

ではない。考えたらダメなんです。考える必要は何もない。直観的に受けとっていかなくては。私が主観的にものを言っているのなら、考えてくださいよ、けれども、私は主観的にものを言ってない。それは人間だから、ちょっと言いすぎたり、言い足りなかったり、いろいろなこともあるよ。けれども、その気迫は常に現在であります。

4 斯て我らの命ずることを汝らが今も行い、後もまた行わんことを、主によりて信ずるなり。5 願くは主なんじらの心を、神の愛とキリストの忍耐とに導き給わんことを。

凄いね、これは。我々の心が「神の愛とキリストの忍耐」と一つになる。珍しい言葉だね。本当に耐え忍ぶ人は荷なっているわけです。荷ないの忍びなんです。

●働かざる者は食うべからず

6 兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず、我等より受けし伝(つたえ)に従わずして妄(みだり)に歩む凡ての兄弟に遠ざかれ。

そのとおり。「そんなのは相手にするな」と。

7 如何にして我らに効(なら)うべきかは、汝らの自ら知る所なり。我らは汝らの中にありて妄(みだり)なる事をせず、

パウロは自分が福音の証者であることを自覚していますから、はっきりこう言える。

8 価なしに人のパンを食せず、反って汝等のうち一人をも累(わずら)わさざらんために、労と苦難とをもて夜昼はたらけり。

今日の題に「労働と平安」と出した、その労働の気持はこの節からきている。パウロは、「私はしっかり働いて幕屋造りをしながら伝道していた。皆それぞれの仕事をもちながら伝道しろ。伝道者はいわゆる人任せで、ただ食べているようなことではダメだ。みんな仕事をしながらだ」

というわけです。キリストは特別ですから。

9 これは権利なき故にあらず、汝等をして我らに効(なら)わしめん為に、自ら模範となりたるなり。

パウロは、

「福音を伝道しているんだから、みんなが食べさせてやったって、それは差し支え

ないんだけれども、そういうわけではない。私のするように何でもいいからやりなさい」

と。ということは例えば、動けない人でもいますね、寝たきり老人なんてのが。寝てたっていいけれども、何か手仕事でも何でもやること。それがお金になろうが、なるまいがいい。

「とにかく仕事をしろ、何もできなかったら祈っていろ」

というわけだ。祈りも仕事だから。大変な仕事だ。人の魂を動かしてしまう。ですから、

「とにかく福音のためには何かやっていろ。それが人にどう思われようと、どんな結果が出てこなかろうとも、とにかく何かをやっていろ」

と。本当は、何か人のためにやることですけれどもね。

「一切は他の人のために」（アッレス　フュア　アンデレ）

というペスタロッチの言葉がある。

「一切はひとの為にで、自分のために生きているのではない」

と。

10**また汝らと偕に在りしとき、人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。**

「働かざる者は食うべからず」

というのはこれからきている。とにかく何かやっていなさい、と。それが人のためになる。儲ける、儲けないなんていうことではないと。経済人間はすぐ、儲けのことを考える。

「金もいらず、地位もいらず、生命もいらず、名も要らず。そういう始末におけない人間が本当のことをするんだ」

というのが西郷南洲の言葉です。彼は大人物です。

●愛はアルファにしてオメガ

キリストのことを誰が「無者」と言いましたか。私はキリストのことを「無者」と言ったのは、

「自分は何もできない、何も言えない」

と、キリスト自身がヨハネ伝でおっしゃっている。

「自分をゼロにしたら、神さまという無限大が彼の中に入ってきた」

から、驚くべきことになった。

「ゼロ＝無限大」

「無即無限無量」

ということはキリストのことです。だから、私は「無者」ということを言っている。自分を、

「何者でもない」

と言ったキリストが、

「我を見し者は父を見しなり」

というのはこのことなんです。

「無限大なる父を見た」

ということです。

12歳のキリストが、過越の祭の時にやってきて、宮で祭司たちと問答して、12歳のキリストが負けやしない。お父さんとお母さんは先に大分行って、どうもやって来ないからと、また戻ってきた。

「お前、なぜ来なかったか？」

と。マリヤもさっぱり分かっていない。聖霊を宿してでき上がった子供のくせに、お母さんのマリヤは全然分かっていない。あれは本当は天の父の気持でやっているのに、それが分かってないものだから、「なぜ……」といってゴタゴタしている。

「私が父のもとにいるのが、あなた方は分かりませんか」

と、12歳のキリストがはっきり言ったでしょ。

「天の父だ」

と。これがイエスなんだ。

皆さん、天来の真理の前には何ものもかなわないですよ。聖霊はもの凄い愛の世界ですから、この召団は本当に深い愛をもって、お互いに交わってください。キリストの愛がお互いの中に交流していなくては。

「どうも東京召団はさっぱり暖かみがない」

なんて、新しい人に感ぜられるようなことだったらダメですよ。愛をもって本当に迎えてあげてください。

「愛はアルファにしてオメガ」

です。

11 **聞く所によれば、汝等のうちに妄に歩みて何の業(わざ)をもなさず、徒事(むだごと)にたずさわる者ありと。**

余計なおしゃべりばっかりしている、と。

12 **我ら斯くのごとき人に、静かに業をなして己のパンを食せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて命じ、かつ勧む。**

「せいぜい、それをしっかりしろ」と。

13 **兄弟よ、なんじら善を行いて倦(う)むな。**

14 **もし此の書にいえる我らの言に従わぬ者あらば、その人を認めて交(まじわ)ることを為(す)な、彼みずから恥じんためなり。** 15 **然れど彼を仇(あだ)の如くせず、兄弟として訓戒せよ。**

懇ろに書いている。

●平安の主

16 **願くは平和の主、みずから何時(いつ)にても凡ての事に平和を汝らに与え給わんことを。願くは主なんじら凡(すべ)ての者と偕に在(いま)さん事を。**

17 **我パウロ手づから筆を執りて汝らの安否を問う。これ我がすべての書の記章(しるし)なり。わが書けるものは斯(かく)の如し。**18 **願くは我らの主イエス・キリストの恩恵(めぐみ)なんじらの凡ての者と偕(とも)ならんことを。**

「平和」ではダメですよ、これは「平安」です。「願くは平安の主」です。ギリシア語の「アイレーネ」という言葉でも、ヘブライ語の「シャーローム」でも、これはもともと平安ですから。平安のない所には本当の平和はないんだから。縦の関係、神・キリストとの関係が安らかであるのを平安という。平安であると、人と人との関係の平和がくる。

「平和、平和」

と言っているのはダメだ。平安という土台のないところに平和はない。よく

「平和運動」

と言っているけれども、情けないよ、「平和、平和」といっているのは。

「平安運動」

をしなければ。「平和の主」ではなく、

「平安の主」

です。

聖書を読むのが一番良い準備になる。参考書なんて要らん。まぁ、大変な書だね、この聖書というのは。無駄がないよ、新約聖書というのは。旧約は無駄があるけれども、新約は無駄がない。大変なもんだ、新約聖書というのは。

ルカ伝に、復活のキリストが戸の閉じている所へ入ってきて、

「私は幽霊ではないぞ。霊には肉と骨がないけれども、私にはちゃんとこの通りあるぞ」

という所がある。

「此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言い給う。

「平和」とは言いやしない。ここではちゃんと「平安」と訳している。そのとおりです。

かれら怖(お)じ懼れて見る所のものを霊ならんと思いしに、

おじ恐れて、語る者が霊かと思った、とある。

イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑(うたがい)おこるか、我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』斯く言いて手と足とを示し給う。

復活のキリストがいかに具体的であるかということ。これは霊体です。

かれら歓喜の余に信ぜずして怪しめる時、
「歓喜の余に信ぜずして怪しむ」という言い方はおもしろい。
イエス言いたもう『ここに何か食物あるか』かれら炙(あぶ)りたる魚一片を捧げたれば、之を取り、その前にて食し給えり。」（ルカ24・36～43）
復活のキリストがお魚を食べたよ。大体これを、普通は宗教物語としている。これは物語ではない。本当なんだ、大変な次元で普通では分からん。キリストの復活体の次元は、霊の世界というのは凄いんだ。

●平安がきていれば何かやらざるを得ない

マリヤなんてのは、聖霊によってキリストを産んだくせに、さっぱりキリストのことを分かってない。スウェーデンボルグ（1688～1772）が言ったそうだね。
「マリヤは天界でまるでキリストの母なる神のように拝まれたら、『とんでもない迷惑だ。私はそんなものではない』とマリヤがかえって迷惑している」
と。さすがに、スウェーデンボルグだ。そうなんだ。
私は聖書をそのまま、分からないが故に信ずるんです。分からないんだ、そんなものは。聖書に書いてあることは、分からないから、受けとるよりかしょうがない。聖書はウソを言っているわけではない。「信ずる」というのは無理に信ずるのではない。それを本当に「受けとる」と、何だか知らないけれども、力が来る。次元のちがった力がくる。人間の普通の知情意の世界をもうひとつ乗り越えると凄いことになる。そこは絶対次元なんだ。
お釈迦さんがいくら偉いといったって、イエスというひとはケタがちがう。桁違いです。お釈迦さんなんてのは後でやっと悟ったんだ。12歳のキリストはケタがちがう。皆さん、イエスという方がいかにもの凄いひとだということは、福音書を読んだって分かるでしょ。福音書をいくら聖書研究したってダメです。福音書を読んで
「降参しました！」
と言って、キリストの前に平伏(ひれふ)せ。そうしたら、その世界に入るから。
御霊の権威だから仕方がない。パウロやペテロやヨハネはその権威をキリストからいただいて、書いたり語ったりした。そして、それは力をもって裏付けられている。
「美しき言葉によらず、徴と不思議と力によって」
とパウロが言っているでしょ。あの徴という言葉は天来の啓示のことなんです。英語でいうと「シグナル」「サイン」、ドイツ語では「ジンボール」「ツァイヘン」です。
参ってしまうな、こういう所を読んでも。参ってしまうと同時に、
「これは凄い現実だなぁ」
といって、それを驚嘆して受けとると、何か知らんが、次元の違ったところに私たちの魂が動きだす。いわゆる摩訶不思議なんていって喜んでいるのではない。そういうことでは

ない。だから、後の方に書いてあるでしょ。

「また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。汝らは此等のことの証人なり。視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』」（ルカ24・44～49）

それで、ペンテコステになるわけだ。

「平安の主」ということです。平安というものは必ず力を伴っている。ギデオンのときもそうです。「平安の神」です。天来の力なんです。それが安らぎとなる。だから、平安です。何が来ようが一向差し支えない、驚かない。

「エホバ之にいいたまいけるは心安かれ怖るる勿れ汝死ぬることあらじ。ここにおいてギデオン彼処にエホバのために祭壇を築き之をエホバシャロムと名けたり。」（士師記6・23～24）

ここに、

「心安かれ怖るな」

とあるでしょ。これはキリストが使った言葉です。

「エホバ　シャロム」「ヤーヴェー　シャーローム」

というのが

「平安の神」

ということです。だから、

「何かやっていろ」

と。それは

「平安が本当にきていれば、何かやらざるを得ない」

と、逆になる。「労働していれば平安がくる」のではない。平安が土台ですから。

「神さまとの交わりが本当の平安の所にくると、縦のシャーロームがくると、それは働かざるを得ない。動かざるを得ない。何かやらざるを得ない。人のために尽くさざるを得ない。生命を与えざるを得ない。福音を伝えざるを得ない」

と。みんなそういうわけです。